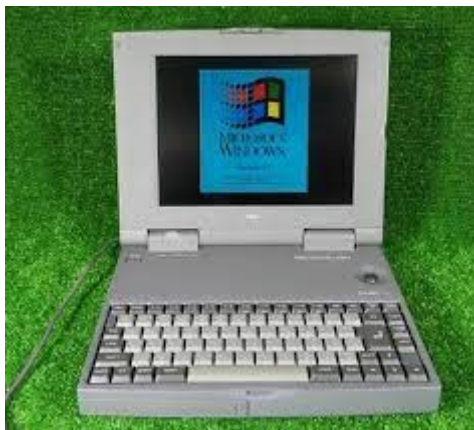


2022/7/14-2

(うと Q 世話し 我が国英語教育のナニコレ珍百景) 書庫版



今を去る事 28 年前、仕事の大失敗で本社フロアから飛ばされた先が「当時まだ我が国の殆どの人が知らなかったインターネット」を研究する「地方工場内の建屋の一角に新設された、とある部署」でした

(windows がまだ直感的操作の採用で操作効率を飛躍的に改善した windows95 に革新される前の、別名 freeze maker “windows3.1”の時代の事です)

本社時代、若手からは冗談交じりに「デジタル難民」「パソコンが最も似合わない男」と揶揄されていた自分には大変きつい部署だったのですが少なくともそこでインターネットなるものを世の中に先駆けて知る事が出来ました。

「知った」というのは存在を認知したという事で扱いを習得したという意味ではありません。

しかしそれ以降ネットを介して世界各国の英文を目にする機会が増えた事は間違いありませんでした。

そしてそこで気が付いたのは、流石に英語を母国語とする人達が同じく英語を母国語にする読者のみを想定して書いているらしい英文には知らない単語が随分と出てきて書いてある内容を知るには辞書は必携の場合もままあったのですが、母国語以外の人たちが書く

又は

母国語以外の人を読者になる事を想定した英文は英語が母国語である人が書いたものでさえ殆どが中学時代に教わった単語ばかりの文章で

「こういう場合はこの単語を使ってこういう組み合わせで言えばいいのか!!」

「えっ、これもありなの？この単語のこの表現でも OK なんだあ」

という

将に日々是「発掘あるある大事典」のサンプル展示会場みたいなもので

「あっ、これは使えるでえ」

「これもいただきやあなあ」

という事の連続。

「これでいいなら自分にだって English speaker になれる可能性があるかもしれへんなあ」

と密かに安堵するとともに、

「なら一丁、やったろかいな」

と眠っていた「ダメ元精神」がズイズイのんのんと鎌首をもたげてまいりました。

それにしても意外だったのは、英語を母国語とする人の英文ですら which とか that 等の関係、接続代名詞がやたら重層的に出てくるような長文が一つもなかった事と英語が母国語以外の人にも分り易い様にとの配慮からか、所謂イディオムと言われるものがあまり見かけられなかった事でした。

公の場という事もあってか仲間内だけに通じるスラングも殆ど皆無でした。

妙な気がしました。

受験によく出る長文がない。

英会話学校でよく見かける「いかにもネイティブらしく感じる」イディオムやスラング含みの文章もあまり見かけない。

出てくるのはその間に挟まれて我が国では却ってあまり見かけない普通の長さの文と初歩的で極めて一般的な単語を使った文章ばかり。

「ぜんぜんちゃうやあんけ」

そして

「じえんじえんまでもでふつうやあんか」

これなら我が国青年男女が受ける英語教育は中学までの 3 年間で十分過ぎるほど十分。過ぎたるはなんとかやあんなあと思ひ

「はあ〜。やあんだ、やあんだ。ナニコレ珍百景」

とため息が漏れてしまいました。